キャラクター名
Gabriela・三上・L□wenthal(ガブリエラ みかみ レーヴェンタール)

プレイヤー名

シンドローム	ノイマン バロール	ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	なし　ニート
オプショナル	ブラム＝ストーカー	年齢	17	性別	女
覚醒	無知	衝動	殺戮	初期侵食率	33　%
出自	名家の生まれ	経験	裏社会　伝説	邂逅	幼子

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	1	0			1
感覚	1	0	0			1
精神	5	0	0			5
社会	2	0	0			2

HP	27
行動値	7
(非装備時)	7
戦闘移動	12
全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	6		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

引用による助言	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
業師	P	N		
テレーズ・ブルム	P　憧憬	N 劣等感		
千代田トオル	P　誠意	N 不信感		
アッシュ・レドリック	P　尽力	N 不快感		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　6	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
乾きの主	1	4	メジャー	至近	単体	白兵	ー	
効果：装甲無視　HPLv*4回復　素手								
コンセ：ブラム	2	2	メジャー	ー	ー	シンド	ー	
効果：C値-Lv個								
血の宴	2	3	メジャー	ー	範選	シンド	ー	
効果：攻撃を範囲選択に変更								
殺戮領域	2							
効果：								
冥界の檻	1	5	セット	至近	範囲	自動	-	
効果：自分以外硬直 自分が移動で解除								
コントロールソート	1	2	メジャー	ー	ー	白兵	ー	
効果：白兵を精神で判定を行う								
キリングアート	1	4	メジャー	ー	ー	白兵	殺120	
効果：攻撃+Lv*2 BS時更に+3d								
時の棺	1	10	オート				100	
効果：いつもの								
メモリー	1							
効果：243人								
ディメンションゲート	★							
効果：								
ポケットディメンジョン	★							
効果：								
写真記憶	★							
効果：								
効果：								

　彼女の家は裕福で、由緒正しい血筋だった。家業も真っ当で、絵に書いたような理想の家庭。しかし、人は正しさだけで生きている訳ではない。当然のように彼女の両親にも『裏の顔』という者は存在した。
　別に両親が最初から酷く破綻していたわけではない。彼らは真っ当に娘を愛していたし、あくまで家庭内に限るならば円満な関係を築けていた筈。
　それが崩れたのは、立場を利用し失脚させた相手が復讐をしにやってきた時だ。彼らを庇ったガブリエラは、的確に復讐者を殺害して見せた。ナイフを持った大人を相手に、素手で。
　その事件その物はきっかけがきっかけである為両親が揉み消す事になる。しかし、彼女はその後暫くの間家庭内で微妙な立ち位置に置かれてしまった。目の前で人を殺しているのだから当然だが、彼女の人生が狂ったのは此処からだった
　まず彼女が行ったのは自分の何が悪かったかを考える事だった。答えは直ぐに出た。簡単だった。『人殺しは悪い事』だ。だが両親に問うても、自分達を庇ってした事だから悪くない、と言う。娘に優しい両親ではあったが、皮肉にもこの答えは『人殺しは悪くない』という誤った認識を彼女に植え付ける事となる。
　そこから更に彼女は考えた。人殺しが悪くないのならば、素手で大人を殺害出来た、両親を守り切った自分の行動はとても凄い事ではないのか？と。自らの才能についての正しい理解を得てしまった彼女は、両親にこう提案した。『次は誰を殺せばいい？』
　結果だけを言うならば、両親が軽率な気持ちで、軽々しく名前を口にしてしまった人間は全員死んでいった。揉み消し等していないのにも関わらず、彼女は捕まらない。何故か『見つからない』という事はなく、必ず死体は発見され報道もされるが、警戒心を重ねに重ね怯え続けた両親の元に法の手が伸びる事は一切無かった。
　67人。両親が指示した数だ。

　次に彼女が疑問に思ったのは、68人目を殺した時だった。その男は彼女の両親を強く憎んでいたようで、今まで感じた屈辱や、敵を暗殺し排除していく外道なやり方への怨嗟をこれでもかと吐きながら死んでいった。当然、幼い子供に殺人をさせている異常性もそこには含まれており、彼女が自信を見つめなおす切っ掛けとなる。
　それから24人。92人まで殺してみたが、彼女の心に生まれた問いは晴れない。両親は『自分達を庇って殺したのだから、それは悪い事ではない』と言った筈だ。それはつまり誰かの為に行動するのは良い事、という事では無いのだろうか。しかし、彼女が殺していく相手は全員が揃って両親や彼女への怨嗟を吐いて死んでいく。そこで彼女は思考の源、行動原理を思い返す。”何故”人を殺したのか。両親を庇ったからか。両親の為になるからか。それも間違いではないが、それは